

「一合いちごうまいた」と「耕たがやす文化」

収穫の秋を迎えました。連日猛暑が続いた夏が過ぎ、讃岐平野では稲穂がたわわに実る季節になりました。日常生活で稲作に関わることが少なくなった現代社会においても、稔りの秋の豊作は素直に嬉しく、大きな喜びを感じます。

今年の夏も「さぬき高松まつり」が盛大に開催されました。打ち上げ場所が変更された花火「どんどん高松」は大好評でした。また、最終日の総踊りの前には、ディズニー・パレードも行われ、沿道の親子連れなどに楽しんでいただきました。そんな中、昨年に引き続き、オープニングセレモニーでは、「正調一合まいた」の輪踊りが実施されました。高松市民よう協会や婦人団体の皆様などとともに、私も浴衣を着て、昔懐かしい盆踊りの風情を味わいながら踊りました。

「正調一合まいた」は、この地方に古くから伝わる豊作祈願の民謡です。「(ハアー) 一合いちごうまいたもみの種たね そのまたますだか 耕高かたかは (コリヤセ) 一石いっこく一斗いっとう一升いっしょう一合いちごうと一勺いっしゃく (サアヨウホイヨウホイヨウイヤセ)」で始まり、以下九合まで数えあげられながら歌われます。意味は、「籾を一合いちごうまいたら、(その千倍以上の) 一石一斗一升一合一勺の実りがあってほしい。」というほどのものです。この歌詞ができた当時の讃岐の小作農は、高い小作料、日照り、水不足に悩まされながら、狭い面積から少しでもたくさんの米を収穫しようとしていたことでしょう。その気合と願望がこの民謡からも感じとれます。そして、輪踊りの振りも稲作に関わる仕草がそのまま取り入れられています。稲刈りのポーズから「刈って、眺めて、喜んで、たくさんとれたと俵を持って、頭を下げて拍手(チョン、チョン)で祝う」という内容です。

「土地ごとに自ら耕し、そしてそれを楽しむことこそ、文化の本質である。英語のカルチャー(文化)は何よりもまず耕作を意味し、土地ごとに自然条件、歴史や伝統を踏まえながらつくるのを、楽しむことに他ならない。」と、故木村尚三郎氏が名著「『耕す文化』の時代」のあとがきで述べています。「正調一合まいた」の輪踊りで表されている世界には、まさに讃岐高松の文化の原点が宿っているのです。